
霜月亜梨香の中学生活。

咲畑珠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霜月亜梨香の中学生活。

【Nコード】

N0833U

【作者名】

咲畑琉璃

【あらすじ】

私は中学生になった。中学校では新しい友達を作ったり、文芸部に入って小説を書いたり、図書委員になったり。……好きな人ができたり。どうして佑君のことを好きになったことに何ヶ月も気付かなかったんだろう。気付かないほうがよかったのに。……私、霜月亜梨香の、中学校での日常生活。

駄文&亀更新です。

ブログ 自分の気持ち。（前書き）

以前書いていた小説は三人称でしたが、一人称に挑戦です。いつも書くのはファンタジーで、現代の話はあまり書かないので苦手です。ですから、かなりの駄文になっていると思います。

もう一つ同時に話を書き始めるという、無謀なことをしているので更新は遅くなります。長さはその話によって違います。

ブログの話は、本編が始まってしばらく後の主人公の気持ちです。きっとこれだけで、どんなことになるのかわかってしまいがすが。

プロローグ 自分の気持ち。

私って、こんな鈍感だったんだ。

私はその事実には呆然とした。

佑君のことを好きだったのに、そのことに何ヶ月も気付かなかった。よく友達に鈍感って言われてたけど、自分の気持ちにこんな鈍感だったなんて……。他の人たちの気持ちには、結構するどいつもりなだけだな。

……。

佑君が、ここちゃんを好きなことだっけすぐわかったし。

ここちゃん、本当に鈍感だよ。佑君は、ここちゃんのこと幼稚園の時から好きだったって言ってたのに。

佑君はここちゃん、ここちゃんは吹奏楽の先輩が好き。五年以上片思いしてたのに、中学になってから好きな人に好きな人ができるって……。だからつい、佑君に「がんばって」なんていつちゃったんだよね。

私は佑君が好きだけど、その気持ちは伝えられない。勇気がないっていうのもあるけど……。

まあ、理由はどうでもいいんだ。私は、佑君とここちゃんに幸せになってもらいたい。どっちにも。今までだっけ佑君を応援して、ここちゃんを応援して。佑君への気持ちに気付いても、私は応援する。

だけど、ここちゃんが先輩と付き合うようになったら、佑君は失恋、ってことになるんだよね。

……今も、失恋したのとは同じか。あ、佑君がここちゃんを好きなら、私も失恋したことになるのかな？

なんて。

佑君が失恋したら、私にも少し希望があるかもしれない。そんなことを考えてしまう自分が嫌だ。どうせ、私は勇気がなくて告白もできないのに。

だって、今の関係が一番気持ちいいんだ。

好きな本の感想を言い合ったり、私が書いた小説を読んでもらったり。ここちゃんは私の小説をほめてばかりだけど、佑君はちゃんと悪いところも指摘してくれるからためになる。

ここちゃんにほめてもらう嬉しさと、佑君にほめてもらう嬉しさは少し違った。前はどうしてかわからなかったけど、今ならわかる。佑君のことが好きだったからだ。

告白したら、その関係がくずれてしまう。それが怖いんだ。

私が告白したら、と考えてみる。

佑君はびっくりする。それで「ありがとっ」って言うてから「ごめん」って断るかな。私は泣けないと思う。

その時、きっと佑君は泣きそうな顔をするから。佑君にそんな顔をされたら、私は泣けるわけがないじゃないか。まだ決まったわけじゃないけど。

告白した後のことは、告白しなきゃ絶対わからない。だから私は、その答えはずっとわからないと思う。

だけど……。

今私が考えたことが本当に告白したら起こりそうで、私はくすつと笑った。そして、笑えることに驚く。

好きになったって気付いた時に、失恋したも同然。それでも、悲しくない。何だかすっきりした気分だな。

いや、悲しくないっていうのは嘘かもしれない。……今、私の目から出てるのは涙だから。

泣いてすっきりして、明日になったらまたいつもの日常を過ごすんだ。私が佑君を好きだってことは、誰にも気付かせない。もし佑君に伝わって、佑君が傷ついたら嫌だもん。

私は、今まで好きな人がいなかった。中学生にもなって、初恋もまだの女子は少ないと思う。私が知らないだけで、たくさんいるのかな？ ……だけど私は、佑君が初めて好きになった人なんだ。

今まで通り、好きな人を訊かれても「いない」って答えなきゃな、と思う。いるってことに気付かれたら、めんどくさいからね。私、めんどくさいの嫌いだから。

……あれ？ 何でますます涙が出てくるんだろう。私は不思議になった。

これも、私が鈍感だからわからないのかな？
というか、どうして私は自分の気持ちなのにわからないんだろう？
こういう人、他にもいるのかな。私以外に。

好きなのに、何ヶ月も気付かない。

そんな馬鹿は、私以外にいないんじゃないかな？ いたら、その人に失礼だけど……。

私は、本当に馬鹿なんだ。

ライトノベル作家を目指して行くせに、何で好きって気持ちに気付かないのさ。自分でも、恋の話とか書いてるのに。

いつの間にか、佑君を目で探していた。佑君と話するのが嬉しかった。だけど、他の女の子と話してるのを見るともやもやして……。

これだけあったのに、どうして私が気付かなかったのか本当に不思議だ。鈍感にもほどがある。

バーカバーカ！

と、慣れない言葉を使い心の中で自分をけなす。……自分をけなすのってすごい落ち込む。

私は、あまり人の悪口を言ったことがない。一応思いつくんだけど、口に出したくないんだ。もちろん、汚い言葉づかいもしたくない。……心の中では汚いかもしれないけど。

だって、口に出したら最後に私自身が落ち込むんだよ？ 何であんなこと言っちゃったんだろう、って。落ち込むのがわかってるのに、わざわざ口に出したくないのは当然。

……こんな関係ないことを考えるのは、少しでも佑君のことを考えないようにするため。

考えちゃったら、好きだって気持ちがあふれてきてしまう。困らせたくないんだ、佑君もここちゃんも。

二人とも、大好きだから。

ブローグ 自分の気持ち。（後書き）

しばらくは、だらだらと主人公の日常を書いていきます。この場面に行くのに……何話かかるかわかりません。

第一話 中学生になりました。（前書き）

プロローグと、雰囲気が変わっているかも……？ 私が以前に書いた小説の前書きにも、こういうことを書きました。変わっていらすみません。

タイトルどうしようか迷いましたが、何となくこれにしました。プロローグとエピソード以外はおそらく、こんな感じになると思います。

第一話 中学生になりました。

四月七日。

私的に短かった春休みが終わり、ついに中学生になりました！

……と、こんなことを言ってるけど。本当はずっと小学生のままがよかった。

だって違う小学校の子がいるんだよ？

人見知りだから、すぐには仲良くなれそうにない。私は受験してないから、同じ小学校の子だって結構いるだろうけど。

一番嫌なのは、自己紹介なんだよな。注目されるなんて絶対嫌だもん。

靴紐を結んで、家のドアを開ける。

「いつてきまーす」

まあ、楽しみなのは確かなんだけどね。

だけど制服変な感じするな……。

家を出た私は、スカートの裾を引っ張った。

小学校の時、スカートなんて一回もはかなかった。スースーして気持ち悪いし、風でめくれるし。ズボンの方が絶対楽だよ。

何より、私は足が太い。制服のスカートはひざくらいの丈だけど……何で皆は、あんな短いスカートはけてたんだろう？ 本当に不思議だ。

考えているうちに、小学校の前を通り過ぎる。……これも中学校が嫌な理由の一つ。私の家から小学校までは、五分もかからないんだ。なのに中学校は三十分以上って……。おかげで、方向音痴な私

はまだ道を覚えていない。

小学校のときに仲が良かった友達と、待ち合わせしてるから安心
だけど。

小学生が登校するには早い時間だから、門は閉まっていた。ここ
をもつくぐることはないんだな、と思うと少し寂しい。……いや、
離任式の日はあるのかな？ お世話になった先生に挨拶しに。

待ち合わせ場所にはもう、私の友達、美奈^{みな}がいた。

「亜梨香^{ありが}！」

「美奈おはよう」

ぶんぶんと手を振っている美奈。今日も朝っぱらから元気いいな
あ。私は朝、眠くて美奈みたいに元気はない。

「おはよ！ ……うむ、亜梨香がスカートはいてると違和感すご
いね」

うん、私もすごい違和感あるよ。美奈とは小三のときからずっと
仲良くて、彼女は私のズボン姿を見慣れてる。だけど、何だか違和
感すごいと言われるのはショックだ。

私だって女の子であるわけで、一応少し、ほんの少しだけならス
カートに憧れちゃうものなのだよ？

「……とりあえず行こ」

そう言って、私は歩き出した。でも、美奈がついてこなくて立ち
止まる。

まだ道覚えてないから、美奈に案内してもらわなきゃ行けないの

に。

困った顔をして立ち止った私を、美奈は呆れたように笑った。

「まだ道覚えてないって大丈夫なの？」

「……大丈夫じゃないよ」

「そうだよ。ま、この美奈さまに任せなさい。ちゃんとして、亜梨香を学校までつれてくから」

むっ。美奈さまって何さ、美奈さまって。自分をさま付けなんてしない方がいいぞ？

私みたいな心が狭い人間は、こうやってむっとしちゃうんだから。

「そんな顔しないしな！ ま、いこつか。早くしないと、入学式から遅刻だよ！」

「美奈は元気だね……」

どうしてそんなに元気なんだろう？

「元気じゃなかったら美奈じゃないもーんだ。ほら、学校まで走れよ！ 負けた方は、後日買った方にアイスをおごる。よい……」

へ？ ちょ、ちょっと待っ——

「ドン！」

「美奈、絶対に自分が勝つってわかってて言ったでしょ!？」

運動神経抜群の美奈と、体育の成績がいつも『もうすこし』か『できる』の私。

……本当に、最後の成績表もらったとき、体育だけが『できる』だったのは落ち込んだ。他の教科はみんな『よくできる』だった

のに。

と、まあ。

そんな二人が競争したら勝つのは当然美奈の方で。

結局、次の日曜日にアイスをおごることになってしまった。というか、この季節にアイス……？

* * *

私が一年三組で、美奈は一年五組。……離れてしまった。一番仲良かったのに。私はクラス分けの結果？　が書いてある紙を持ち、がつくりとうなだれて下駄箱へ向かった。

三組には、あんまり話したことない子がいっぱいだ。唯一仲が良かったと言えるのは、部田^{とりた}季郷^{きさと}ちゃん。私と同じで本が大好きな子。……あだ名は『ブタ』だった。でも、本当は『とりた』なんだよ？　ブタって……女の子にそのあだ名は酷いと思う。

季郷ちゃんとは一年二年と同じで、五、六年生のときも同じクラスだった。ブタってあだ名を付けたのは、おバカな何とか君。一年生で同じクラスだったけど、途中で転校したから名前を覚えてない。

「あ、季郷ちゃん」

一年三組の教室に行こうと上履きに履き替えたら、季郷ちゃんが来た。

「おお、霜月^{しもつき}。またクラス一緒だな」

私のことを名字で呼び捨てにする女の子は、たぶん季郷ちゃんだ

けだ。

「うん同じだね。教室行こう」

丁度生徒会の人が、一年三組の子たちを集めている。

私たちは黙って生徒会の人についていった。季郷ちゃんは美奈と違って、一緒にいると黙っても落ち着く。だから美奈の次に仲が良いんだ。

次に、ではないかも。一緒にいて楽しいのは同じだけど、美奈と季郷ちゃんはちょっと違うからね。比べたりできない。

季郷ちゃんと一緒に階段を上りながら、季郷ちゃんのあだ名はまた『ブタ』なのかな……と思った。

第二話 自己紹介は苦手です。（前書き）

文章・ストーリー評価をしてくださった方がいました！

第二話 自己紹介は苦手です。

……結論から言つと。

可哀想に、季郷ちゃんのだ名は『ブタ』になつてしまった。

自己紹介の前に先生が、クラスの人の名前を呼んでいったんだ。
季郷ちゃんの番になったとき、それまですらすらと呼んでいた先生が黙り込んだ。

「……部田^{ぶた}季郷」

私や季郷ちゃんと同じ学校だった人は、皆固まった。

あーあ、この先生言つちやったよ。とても言いそうな雰囲気だ。
実際「あーあ」と小声でつぶやいている人だっている。

他の子たちは、頭の上に何個も疑問符が浮かんでいる気がする。
そんな中、季郷ちゃんは冷静に訂正した。

「先生、私は『とりた』です」
「……部田^{とりた}季郷」

先生、『ブタ』と言つたことに何の謝罪もないんですか。

私の先生への評価はがた落ちだ。最初から高くなかつただけ。だ
つて鬢^{かつら}ずれて、テカテカの頭が見えてるんだもん。

もちろん、それを指摘できるような勇気を私は持っていない。

「……………」

季郷ちゃんの名前を聞いてしばらく、教室内がしーんと静かになつた。

そして笑い声が爆発する。

「あははははっ」

「ふふっ」

「はははっ」

「豚！？ 豚って……ぷっ」

などなど。皆様々な笑い声を聞かせてくれましたとも。

……季郷ちゃん、お願いだから怒らないでね。私、一年生るとき君の怒った声で、泣いちゃったんだから。今思い出しても怖い。というか、一番最初季郷ちゃんの前の席だったから、大きい声にびっくりしたっていうのが正しいかな？

『お前らー！ うるせー！』

なんてすぐ後ろで叫ばれたら、泣くに決まってる。だって一年生だよ？ 六歳児だよ？

私が泣いてるのに気付いたら、すぐに謝ってくれたけど。

今、運がいいのか悪いのか、私は季郷ちゃんの後ろの席。……大きい声はびっくりするからやだなあ。

「次、夏下なつもとここー！」

「はい」

どうやら季郷ちゃんは我慢してくれたみたいだ。この後、誰かが余計なことを言わなければいいな……。

ほっとして次の夏下ここに目をやると、思わず見とれてしまった。……綺麗。

腰まである黒い髪はサラサラ艶々。瞳を縁取るまつげは、私の倍

くらいは長い。……二重だ。羨ましい。私は一重なのに。

肌だつてとっても白い。それなのに、頬はほんのりピンク色。

座ったままだけど、スカートから見える足はスラッとして長くて細い。

……私は太いの。

私が張り合えるには、背の高さくらいかもしれない。私は百六十三センチメートルと結構高め。夏下さんも、それくらいはありそうだ。

何から何まで、嫉妬してしまうほど完璧だよ……。

こういう人は、性格悪いんだよな。外見がいい人は、性格悪いよね。

うん、そうだと思いたい。外見がよくて、性格までいいなんてありえないよ。今までそんな人に会ったことがない。

夏下さんに見とれている間に、何だか皆は廊下に並びだしていた。季郷ちゃんが教室を出ようとして、座ったままの私に気付いて近寄ってきた。

「霜月、行かないの？」

「ほへ？」

あうう、全く先生の話聞いてなかったよ……。

「どこ行くの？」

「話聞いてなかったの？　これから体育館で、入学式やるんだってさ」

聞いてなくてすみません。

* * *

言う事は唯一つ。

どこの学校も、校長先生の話は長い。

そこは共通らしい。長すぎて寝ちゃうかと思ったよ。私は教室に戻ると、椅子に座って欠伸をした。

校長先生の話聞いた後は写真撮影をした。お母さんと一緒にね。私は美奈と二人で来たけど、お母さんも後から来たんだ。

……写真撮影は苦手だ。ハイ、チーズなんて言われたって、笑えるはずがない。

今ふと思っただけど、何で写真取るときに「チーズ」って言うんだろっ？

チーズってあれだよな？ ねずみが好きな。……ああ、そういえばこれは間違いなんだっけ。ねずみはチーズが嫌いなんだった。

そんなことはどうでもいいけど、帰ったらパソコンで調べてみよう。

「さて、今日は皆に自己紹介してもらってから帰ろうと思う」

うわっ自己紹介か。……先生、その若い人みたい(？)なしゃべり方、似合いませんよ。正確な年齢はわからないけど、多分五十は過ぎてるんじゃないですか？

あ、先生の名前って何だっけ。確か最初に言ってたと思うんだけど……。忘れてしまった。

「自己紹介……」

季郷ちゃんが顔をしかめてつぶやく。まあ、仕方ないよね。自己

紹介はただ自分の名前を言ったり、得意なことを言ったりするだけ。だけど、先生のせいで『とりた』という苗字が『ぶた』と書くとはわかってしまったんだから。

皆それが部田と書くとは思わないだろうけど。でも、わかる人にはわかんと思うんだけどなあ。服部はっとりって苗字は読めるだろうし。

出席番号一番の人から順に、教室の前で自己紹介をしていく。

私は人の名前と顔を覚えるのが苦手だ。今も必死で覚えようと思ってるけど、三人目の時点で一番の人の名前も顔もわからなくなっちゃった。わかるのは、同じ小学校だった子だけか……。

私の前の子が終わり、私の番が来る。やだなあ、自己紹介。

「……霜月亜梨香です。得意なことは、習字です。よろしく願います」

顔熱つ。これだけなのに何でこんなに熱くなるんだろう？ 多分、私の顔は今、すっごく赤くなってるはずだ。

得意なことを習字と言ったのは、私は小二のときから習字を習っているからだ。他にはピアノもやっている。前はスイミングスクールに通ってたけど……まあ、それはいいや。

しばらくすると、季郷ちゃんの番が来た。えっと、季郷ちゃんの前の方の名前は……？ はあ、やっぱり覚えてない。名前順で座っていないから、今誰が自己紹介をしたのかもわからない。

しぶしぶと椅子から立ち上がり、季郷ちゃんは前に出た。

「部田季郷です。部活の部に、田んぼの田でとりたと読めます。好きなことは読書で、嫌いなこと……というか、嫌いな人は自分をブ

タと言う人です。目上の人じゃなかったら容赦なくぶっ飛ばすので、そのつもりでお願いします」

先生が引きつった顔で、季郷ちゃんの自己紹介を聞いている。嫌いだって言われたも同然だからな。

同情はしないけど。だって、読みを確認しないでぶたって呼んだ先生が悪い。

そういえば、五年のときの自己紹介でも似たようなこと言ってたな。それでも男の子は皆ブタって呼んで……。何人の子が季郷ちゃんに泣かされたんだろう。泣かされてもやめないうてさ、もしかしてマゾだったのかな？

「夏下ここです」

ぼうつとしている間に夏下さんの自己紹介が始まった。今日新しく覚えたのは、夏下さんだけだ……。

「小学校で三年間テナーサックスを吹いていて、中学でも部活は吹奏楽にしたいと思っています。もちろん、楽器はテナーサックスです。得意な教科は、音楽と体育。……それ以外の教科は苦手です。ははっ」

恥ずかしそうに笑う夏下さんは、すごく可愛かった。さっきは綺麗だと思ったけど、こんなふうに笑うと可愛い。……羨ましいよ、そんな可愛くてさ。

教室の男子は、皆ぼうつと夏下さんに見とれてるみたい。

「よろしくお願いしますー！」

この後も自己紹介は続いたけど、夏下さんの名前しか新しく覚えられなかった。

……季郷ちゃんをブタと呼んだ人が、何人もぶっ飛ばされていた。
うん、やっぱり季郷ちゃんは怒らせると怖いね。

第三話 方向音痴仲間がいました。

……覚えられるわけない。学校の中の道を、一度案内されただけで覚える人間なんているのかな？ いたら、その人のことを尊敬してしまう。

これでわかるとおり、今日は学校の中を担任の先生に案内してもらっていた。入学式の日には保護者に配られた紙を見ると、この先生は東郷幸樹先生だったと思う。はつきりとはわからないな。『う』が三つあったのは覚えてたんだけど。

……先生の名前なんてどうでもいい。今覚えなきゃ駄目なのは、よく使いそうな教室がどこにあるか。

近くにいる季郷ちゃんに、こそつと訊く。

「季郷ちゃん、理科室はどこだっけ？」

「……第一は北校舎の一階。第二は北校舎の三階だよ。お前って本当に方向音痴だな」

方向音痴の何が悪いのさ。道なんて覚えられないよ。これが何かの用語とかなら覚えられるんだけどな。

そう言つと、季郷ちゃんは眉をひそめた。

「何それ嫌味？」

え？

どうなつたらそうなるの？

「霜月は頭いいからな。それで何で道を覚えられないのかはわかん

ないけど」

「私頭よくないよ?」

「……嫌味だつ。テストで毎回百点取ってるくせに」

普通じゃないのかな? 中学校のテストはまだやってないけど、小学校のテストくらいなら余裕で百点取れると思うんだけど。お母さんだって、小学校まではテストで毎回百点取りなさいって言うたし。

だけどそれを言ってしまうと、もっと季郷ちゃんの機嫌が悪くなる気がして言わなかった。

「ここは図書室だ」

先生の声にはっとして、場所を確認する。えっと……うん、北校舎一階の端から二番目だ。図書室の場所だけは覚えとかなきゃ。

昼休みは十五分しかないけど、五時間目が体育じゃなければできるだけ利用しよう。一応毎週家の近くの図書館に行ってるけど、これからは学校の図書室で。小学校の図書室は全然面白い本がなかったけど、中学校ではどうなんだろう。どんな本があるかで、図書館か学校の図書室か決めようかな。

「……亜梨香ちゃん、よね」

急に声をかけられてびっくりする。

声を発したのは、私が唯一クラスで覚えた夏下さんだった。

「ここって、北校舎?」

「へ? あ、うん。そうだよ。……何で訊いたの?」

もしかしたら私と同じで、本が好きなかもしれない。

「いや……。あたしって本全然読まなくて。母ちゃんに、中学校の図書室の本くらいは読みなさいって言われてね」

母ちゃん？ 何だか予想外だ。夏下さんだったら「お母様」とか呼んでも不思議じゃない雰囲気なのに。

「道覚えるの苦手なのよ。だけど、図書室くらいは覚えとこうかなあつて」

……仲間がいた！ ほら季郷ちゃん、ここにも一人、方向音痴の人がいるよ！

何だか嬉しくて、につこりと夏下さんに笑顔を向ける。

「私も方向音痴なんだ」

「亜梨香ちゃんも？」

「うん。道って覚えられないよね……。今学校の中案内してもらってるけど、これだけで覚えられる人は尊敬しちゃうよ」

夏下さんと共通の話題があるとは思ってなかった。これで少しは仲良くなれそうかも。自己紹介……というより、先生に名前を呼ばれた時から仲良くなりたいてって思ってたんだよね。方向音痴っていうのも、たまにはいいことあるんだな。

夏下さんは目をキラキラ輝かせた。自分の気持ちがわかってくれる人がいて、嬉しいのかな？ 私と同じか。

「わかる！」

横で季郷ちゃんが、呆れた目で見ていた。……その目は何？ 私

以外に方向音痴の人がいたってわかって、喜ぶのは悪いの？

「……霜月と夏下さん、行かないの？ 置いてくよ？」

気付いたら、クラスの皆は結構遠くに行ってしまった。季郷ちゃんが呆れてたのはこれか！ 早く言ってよ。

……そういえば夏下さん、全然性格悪くない。何もかも完璧、なのか。

* * *

学校の中を一通り歩くと、一年三組の教室に戻った。その間、私は夏下さん小さな声で話しながら歩いていった。本をあまり読まない人でも読みやすい本を、紹介してあげた。夏下さんと仲良くなれてすっごく嬉しい。方向音痴仲間だしね。

自分の椅子に座って、ほうつとため息をつく。少し歩いただけなのに、すっごく疲れた。運動不足かあ。私運動嫌いだからな……。

「今日は、委員会を決める」

そういえば、生徒会の人の説明してたな。私が覚えてたのは図書委員だけだ。

先生が黒板に委員会の名前を書いていく。えーと？ 学級、美化、図書、体育……。男女一人ずつみたいだから、全員が入るってわけじゃないのか。ま、誰もいなかったら図書委員になるのかな。

「では話し合って、誰が委員会に入るか決めてくれ」

これは女子同士、男子同士でつてことだよね？

とりあえず立ち上がった、季郷ちゃんと一緒に教室の前に行く。

男子には後ろで話し合ってもらおう。私たちに続いて、他の女子もわらわらと集まってきた。

「美化委員になりたい人は手を挙げてください」

何となく、夏下さんが司会みたいになった。

二人手を挙げる。確か……駄目だ、名前思い出せないや。

図書委員の番が来るまで、私はぼうつと待っていた。他の委員会に入る気なんて、これっぽっちもないしね。

「図書委員になりたい人」

しーん……。

あれれ？ 図書委員ってこんな人気ないの？ 誰も手を挙げないなら遠慮なく……本当にいいのかな？

びくびくと手を挙げてみる。他の委員会は絶対二人くらい手を挙げてたのに、どうして図書委員だけいないんだろう。やっぱり、図書委員の仕事は面倒だからかな。私は学級委員とかの方が面倒だと思っただけど。

「じゃあ、図書委員は亜梨香ちゃんに決定ね。……これで委員会決めは終わりっつと」

夏下さんがそう締めくくった。ぼんやりと話を聞いていた限り、夏下さんが学級委員になったみたいだ。

先生に報告して、席に戻る。

四時間目が終わるのが十二時四十分で、今が十二時三十分。後十

分か……。何だか時間が経つのが早く感じるな。給食を食べずに帰るから、図書室にいけないのが残念だ。

「これから配る紙に、今月の目標を書け」

声だけ聞いてると、本当におじさんの声には聞こえない。

配られたのは、オレンジ色の紙だった。そういえば三組のクラスカラーはオレンジなんだっけ。

今月の目標かぁ。どうしようかな。授業中にあくびをしない、とか？ それとも、学校で迷子にならない、とか？

……どっちも、何だか書いちゃ駄目な気がする。

あ、ならクラスメートの名前を覚える、ってどうだろう？ 同じ小学校の子の名前と、夏下さんの名前しか覚えてないのはね……。

「……クラスメートの名前を覚える。よし」

小声でつぶやきながら、シャープペンで字を書く。相変わらず、見づらい字だな。毛筆で書くのは結構得意だけど、硬筆は駄目だ。

「相変わらず、字うつまいな」

季郷ちゃん、それは間違えじゃない？ 君の方が字上手いと思うけど。ちなみに、季郷ちゃんは左利きだ。まあ、右でも左でも書けるから、両利きって言つべきなのかな。

「季郷ちゃんの方が上手いよ？」

「……嫌味だっ」

気のせいかな？ 最近、季郷ちゃんに「嫌味だっ」と言われることが増えた気がする。

「後ろの人、紙を集めて」

チャイムが鳴って、四時間目が終了。この列の一番後ろの人……
あかしいすみ
明石泉ちゃんだっけ。

紙を渡した後、三組の人の名前が書いてる紙をかばんから出す。
あから始まるから、一番上の辺りか。明石泉ちゃんの名前は……お
お！ あった。出席番号二番。一番の子は、あいば れおん相羽伶音君か……。伶
音って、日本人っぽくない名前だ。

明石泉ちゃんと、相羽伶音君。これで新しく、二人の名前を覚え
た！ 一日二人ペースだったら、何とか全員の名前を覚えられそう
だな。

泉ちゃんは先生に紙を出し、自分の席に戻る途中私に声をかけて
きた。

「亜梨香ちゃん、字上手だね」

泉ちゃん……。私は紙で確認してやっと名前がわかるのに、泉ち
ゃんは確認しなくてもわかるんだね。何だか負けた感じた。

「そんなことないよ」

「……………嫌味？」

なっ。

泉ちゃんにまで言われるなんて思ってた……。

これから、もっとよく考えてから口に出そうかな？

第三話 方向音痴仲間がいました。(後書き)

私自身、人の名前や道を覚えるのは苦手です。

第四話 遠足って言い方格好悪いです。

遠足。

今日は遠足で綺羅きらわ和公園に行くんだ。入学して一週間も経たないうちに行くのは、皆が仲良くなるためののかな？

一、二時間目は学活をやって、三、四時間目が遠足。綺羅和公園で遊んでから学校に戻る。そしたら解散だ。

小学校のときだって『社会化見学』とか『理科見学』とかだったのに。中学になって遠足って、なんか格好悪い気がするのは私だけかな。

「ほら霜月。はぐれたら家に帰れないぞ？」

「ああ、皆が先行ってる！」

こんなことを考えてる間に、クラスの皆が遠くに行ってしまった。

うー、季郷ちゃんの言う通り、はぐれたら家に帰れない。というか、遠足の目的地の綺羅和公園にもたどり着けないよ。

ただ遊ぶだけなんて、幼稚園の遠足みたいだな。だから何とか見学じゃないんだろうけどね。……ってこんなことを考えてたら、ますます置いていかれちゃう。

「走ろう！」

私を待つてくれていた季郷ちゃんと、走り出す。……季郷ちゃん意外に足速い。置いていけないで。

クラスの皆に追いついたときには、もう息が切れてしまった。運動不足だ。部活、運動系にしようかなあ。だけど、文芸部に入りた

いんだよね……。どうしよう。確か、来週中に入部届け出さなきゃ駄目だった気がする。土日間に考えておこうかな。

……あ、そういえば日曜日、美奈にアイスおごるんだった。美奈、忘れてたらしいな。あの子食べ物への執着心すごいから、絶対忘れないだろうけど。

「大丈夫か？ 霜月」

「大丈夫だよ」

季郷ちゃんが心配そうに私を見てるのは、息がゼーゼーいつてるのと、顔が真っ赤なせいだと思う。緊張したときもそうだけど、暑いときや運動した後は顔が真っ赤になるんだよね。小学校の時、冬に暖房ついてたら皆に心配されたもん。顔赤いよって。

「……それから、また置いてかれるぞ」

え、また！？ 慌てて前を確認すると、さっきほどではないけどクラスの皆から離れていた。考え事していると歩くの遅くなったり止まっちゃう癖、直したいな……。

* * *

綺羅和公園に着いたら、すぐに自由時間だった。

さて、どうしようかな。美奈とか、他のクラスの子探してまで遊ばなくてもいいと思うんだよね。

とはいえ、このクラスで仲がいいのは季郷ちゃんと……一応夏下さんか。方向音痴仲間だから。季郷ちゃんと夏下さんを誘ってみようかな。でも、季郷ちゃんとはともかく、夏下さんは友達いっぱい

そつだ。もう他の子と遊びだしてるかもしれない。

季郷ちゃんは傍にいたから、夏下さんをきよろきよと探す。一年生は二百人以上いるから、探すのが大変だ。同じクラスの人は一列になつてたから、少しは探しやすいんだけどね。

あ、いた。

「亜梨香ちゃん！」

夏下さんも私を探してたのか、私の姿を見ると近づいてきた。

「鬼ごっこしない？ 三人で」

それは季郷ちゃんもいれて、だよな。鬼ごっこか。私、多分一番不利だよな。季郷ちゃんは足速いし、夏下さんは体育が得意だつて自己紹介で言つてたし。

負ける勝負は受けない主義なんだけど……いつか。することないもん。

「いいよ。季郷ちゃんもいい？」

「ああ」

「じゃ、鬼決めましょう」

夏下さんが拳を出す。やっぱり、こついつのはじゃんけんだよな。

「最初はグー、じゃんけんぽん！」

……季郷ちゃんパー、夏下さんもパー。

私だけグー。

何でこんなじゃんけん弱いのか？ 一人負け……。まあ、三人だ

から一人負けもあるだろうけど。だけど一回目で？

「じゃ、鬼は亜梨香ちゃん！ 十秒数えてね。よいスタート！」

いち、にー、さーん……。二人とも速つ。何そのスピード。季郷ちゃん、さつきは本気出してなかったんだね？ 夏下さんの方が速いけど。もう夏下さんは、吹奏楽部じゃなくて陸上部でもいいんじゃないかな？ 十分、やってけると思うよ。

よし、十秒経った。十秒であんなに遠く行っちゃうのか。すごいな。

……今日一日、鬼をやらなきゃ駄目？

とりあえず追いかけようか。全力疾走で！ そうしなきゃ、絶対追いつけない。全力疾走でも、追いつけないかもしれない。

気付けば、他の子たちも大体が鬼ごっこをして遊んでいた。

三人だけで鬼ごっこは、ちょっと寂しいかも。えっと美奈は……クラスの子たちと鬼ごっこか。

もうあんなに友達できたんだ。……何だか自信がなくなってくる。私と一緒にいるときよりも、楽しそうに鬼ごっこをしている美奈を見ると。私は美奈の親友のつもりだったけど、そう思ってるのはこっちだけなんじゃないかって。

「……とりあえず、行くか」

美奈に気を取られている暇はない。早く季郷ちゃんと夏下さんを追いかけなきゃ。

私は小さくつぶやいて、自分が出せる最大の速さで二人を追いか始めた。それでもやっぱり、二人の方が速いんだよね。

十分くらいしてようやく季郷ちゃんを捕まえて……そのすぐ後にまた捕まりました。今度は夏下さんを捕まえようと必死になっていると、もう学校へ帰る時間になってしまった。

「夏下さん速すぎだよ……」

帰る途中、つい恨めしげにそう言ってしまう。体育の授業で五十メートル走を計るときが楽しみだ。一体、私より何秒速いんだろう。夏下さんは首をかしげた。

「ねえ、亜梨香ちゃん。あたしのこと、ここって呼んでいいのよ？」

あ、速すぎって言葉はスルーなんだ？

私は夏下さんの顔をじつと見た。夏下さんをここ……いや、無理だ絶対。美奈とだって、会って一年経たなきゃ、呼び捨てなんてできなかつたもん。まだ夏下さんと会って一週間しか経ってないのに、そんなこと無理だよ。

ここは無理でも、ここちゃんなら何とかなるか。

「じゃあ、ここちゃんって呼んでいい？」

「うーん、まあいいか。あたしはじゃあ、亜梨香って呼んでいい？」

自分が呼ぶのは無理でも、呼ばれるのは別に構わない。

「いいよ」

私がうなずくとここちゃんはすごく嬉しそうに笑って、今度は季郷ちゃんを振りかえった。

「季郷ちゃんのこと季郷って呼んでいい？ あたしのこともここ

でいいから」

「ああ。わかったよ、ここ」

季郷ちゃん、何でそんなにあっさりと……。私は美奈を自然に呼び捨てできるようになるまで、確か三ヶ月かった。それをあっさりとされてしまうと悔しい。

試しに心の中でつぶやいてみる。

ここ。

……やっぱり無理！　ここちゃんが限界だ。

美奈がここちゃんに会ってすぐにここちゃんのことを「ここ」「ここ」って呼んで、ショックを受けたのはまた別の話。

第四話 遠足って言い方格好悪いです。(後書き)

公園の名前は適当につけました。

第五話　アイスをおこります。

日曜日になった。

……私のお財布はすつからかん。いや、本当にお金がないわけじゃないんだけど。一応あるんだよ？　一円玉が二枚。

「……美奈、お腹壊すよ。そろそろやめたら？」
「ん？」

私の言葉に、美奈はきよとした。

はあ、何で私は美奈にアイスをおこってるんだろう。しかも七つ目。春だし、アイスはそんなに食べないだろうと思ってたのに。何で七つも食べるの？　お金もつと持ってたければよかった。

口の中のアイスを、美奈がごくんと飲み込む。

「だいじょぶ！　アイスは別腹。別腹は壊れないもんね」

どんな理屈だ。

「さて、もう一個食べようかなっ」

「まだ食べるの！？　もうお金ないよ！」

八つ目！？

……そういえば私、あの時一言も美奈と戦うなんて言ってないよね。あれ？　何でおこることになったんだ？　もしかして美奈に騙された？

「えー。もうないの？　全種類食べるつもりだったのに」

全種類って……。二十種類くらいあるんですが？ 流石にそれは無理でしょう。美奈なら食べれそうで怖いけど。

何でそんなに大食いなのに、太ってないのか不思議だ。私よりも軽いよね、絶対。

うーん、と美奈がうなる。

「しょうがない、アイスは諦めるかー。じゃ、亜梨香」

「何？」

「何でもない」

美奈は相変わらずだな。こういう、たまに意味がわからないところ。

私たちは、近くのショッピングモールに来ていた。アイスが買える所で一番近いのが、ここだったんだ。

二つ、三つくらいまでは、私だって仕方ないと思ってた。だけど最終的に七つ。……お母さんに怒られるかも。無駄遣いするなって私はため息をついて、座っていたベンチから立ち上がった。

「とりあえず、することもないし帰る？」

「やだー。つまんない。まだ午前中だよ？」

私はお金がないからそう言ったんだけど。お金がなくて、ショッピングモールで何ができるの？ 私のお金を二円にした張本人が何を言うのさ。

「じゃあ何するの？」

美奈が座ったままなので、私も座りなおす。

「ただ話だけでもいいじゃん。なんかさ、最近亜梨香がよそよしくなってきた気がするんだよね。だからゆっくり話そうかなーって」

ぎくつとした。

少し距離を取っていたのを、気付かれてたんだ。隠してたつもりだったから、美奈が気付いたことが少し嬉しい。やっぱり、美奈は親友なのかなって。

「美奈に、言いたいことない？」

言いたいこと、かあ。

…… 本当に、私と美奈は親友なの？

何も考えずにそう言えたら、楽なものにな。これを言ったら美奈は絶対怒るってわかってるから、言う気になれない。美奈は怒ると、軽く半年は口を利いてくれないから。喧嘩なんて滅多にしないけど、一回だけしたときは大変だった。私も美奈も頑固だからね。どっちも謝らずに、半年くらい過ごしてた。

まあ、あれがあつたからこそ親友だって言えたんだろうけど。

うん、言えたんだ。でも今は自信がない。

「言いたい、というか、訊きたいことはあるよ。だけど、これを言くと美奈は怒るもん。訊かない」

言ってから、これはまずかったかな、と美奈の顔を見る。美奈が怒るから訊かない、なんて言うんじゃない。これを言つと、美奈は絶対怒るのに。怒らせるのなら、訊いても訊かなくても同じだ。案の定、美奈は不機嫌そうな顔を隠そうともせずと言った。

「何それ？ 訊きたいことがあるんなら訊けばいいじゃん。美奈、亜梨香のそういうところ大っ嫌い」

……大っ嫌いまで言われるとは思ってなかった。これは……傷つく。

私って、本当にこういうの苦手なんだよね。どうでもいい人に嫌いつて言われるのはよくても、友達に言われると。

あ、泣いちゃうかもしれない。

じわつと視界がにじんで、でもそれをばれないように言葉をさがす。

「……いいよ、嫌いでも。私は私で、新しい友達と仲良くするし？」

声が震えないよう努力しても、駄目だった。

私が泣きそうになっていることに気付いた美奈が、はつと言いつつ始める。

「ち、違う！ 今のはただ口から勝手に出ちゃっ——」

「それって、今のが本心ってことでしょ？ ……学校への道だって覚えたし、明日からは別々に学校に行こう。じゃあ」

私は美奈から逃げるように走り出した。ううん、本当に逃げたんだ。

美奈の足なら、簡単に私に追いつけるはずだ。でも、追いかけてこない。目のふちに溜まっていた涙が、頬を伝った。

それをぐいっと手で拭いて、出口を探しながら走る。このショッピングモールに来ることはあまりなくて、まだ道を覚えていない。

美奈と喧嘩したのは、小四のときに一回だけ。どうやって仲直り

したんだっけ。

確か……。

『ごめん』

だったかな？

半年くらい口を利いてなかったからそろそろ二人とも限界で、同時に謝った。他に人がいなくて、目が合ったとき。

今回の喧嘩も、それで終わってくれたらいいな。

だけど私は頑固だ。

自分が悪いとわかっていたら謝るけど、そうじゃなかったら向こうが謝るのを待つ。

今日の喧嘩は、美奈が悪いもん。だから絶対、私からは謝らない。前に喧嘩したときみたいに、折れたりしない。

……美奈も、私と似てるからな。どうなんだろう。ちゃんと、仲直りできるかな。これで、ずーっと喧嘩したままだったらどうしよう。違うクラスだから、なかなか会いにいけないし。来年クラス替えしたって、同じクラスになれるかわからない。だって全部で七クラスあるからね。

「あ」

ようやく出口を見つけた。美奈が後ろから追いかけてくる様子もなく、私は走るのをやめて歩き出した。

追いかけてきてほしかった。追いかけてきてくれたら私だって、すぐに謝れたのに。これだと、素直に謝れないじゃないか。

絶対に向こうが謝るまで待ってやる。ずっとずーっと。

「……美奈の馬鹿」

小声でぼそっとつぶやく。

美奈の馬鹿、なんて言ってしまったのが悲しくて、また視界がに
じんだ。

第五話 アイスをおこります。 （後書き）

この二人は、しばらく仲直りしそうにありません。

第六話 ようやく図書室に行けます。（前書き）

……どうしよう、もう一つの小説の方が書いていて楽しいです。
こちらもし楽しくないわけではないんですが……。

第六話 ようやく図書室に行けます。

道を覚えていないといっても、他に同じ学校の人がいたから普通に学校に行けた。美奈ならいつも待ち合わせしてる時より早く出るだろうと思つて、私はいつもどおりの時間に家を出た。

元気がない私を、お母さんは心配してくれた。休んだほうがいいんじゃないかって言われたけど、私は学校に行くことにした。

「亜梨香、どうしたの？」

教室に着くと、こちゃんが訊いてきた。季郷ちゃんも気になっていたのか、少しだけ傍によつてきて聞き耳を立てている。

「ううん、何でもないよ」

本当は、結構落ち込んでるけど。

あれは美奈が悪かったと思つてはいるけど、私が全く悪いわけじゃなかった。……本当に、仲直りできるのかな。

こちゃんは信じてないみたいだったけど、私の言葉に一応納得して自分の席に戻った。今日から、本格的に授業が始まる。今日までは、成績の付け方の話が多かったからね。小学校と違って、どんな授業なんだろう。予習しといたから、心配はしてないけど。

楽しみだなあ、昼休み。今日は六時間目まであるから、昼休みもあるんだよね。やっと図書室に行けると思うと嬉しい。図書委員の仕事が始まるのは、明後日からだ。明日の放課後に委員会があつて、当番の日を決めるから。

一時間目は何だっけ……。

後ろの黒板で時間割を確認する。うん、数学だ。……うわっ、数学か。やだなあ。

別に私は、数学が嫌いなわけじゃない。むしろ好きなほうだ。ただ、先生がな……。海野先生うみのっていう男の先生なんだけどね。

あんまりはつきりと言えないけど、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ気持ち悪いんだ。何て言ったらいいんだろう。ホモ疑惑っていうか。

でもさ、いくら生徒に言われたからって、

『君の瞳に……チェックメイツ!』

なんて言うかな？ 君の瞳に、の後に続くのが、あれじゃなくてよかったよ。海野先生に言われたら、あの曲のイメージが壊れる。私結構あの曲好きだもん。

あ、鐘が鳴った。朝学活か。やだなあ、数学。小学校の時の算数の先生は元高校の数学教師で、すごくわかりやすかった。時々出てくれる難問だって面白かったし。

……美奈は海野先生のことどう思ってるんだろう。美奈って、ああいう変わった先生が好きなんだよね。海野先生について、美奈とぎゃーぎゃー話したい。

謝ろうかな……。いやいや、今度こそ美奈に謝ってもらわなきゃ！でも私も悪いのにな。どうしようどうしよう。

ん？ もう朝学活が終わってる？
全く先生の話聞いてなかった……。

* * *

初めての給食の感想。言ってしまうと、小学校のときの方がおいしかった。ま、それはいいや。でも食べる時間が十分じゃないのはな……。給食の時間は二十五分あるけど、準備も入れると十分になっってしまう。何でこんな時間かかるんだろう？

そんなことより、昼休みだっ。

私はもう、美奈との喧嘩をあまり気にしていなかった。くよくよしてたって、どうにもならない。何事もポジティブに考えなきゃ。仲直りしたときには、もっと仲が良くなってるかもしれないしねっ。

「ここちゃん、昼休み図書室行く？」

一人で行くのは寂しいから、ここちゃんに声をかけてみた。季郷ちゃんも誘おうかとも思ったけど、季郷ちゃんは図書館でいっぱい本借りてるんだもん。

ここちゃんは少し考えた後、

「そうしようかな。行きましよう、亜梨香」

そういえば『亜梨香』って呼ばれるようになったんだっ。さっきも呼ばれてたけど、気付かなかったな。何だか恥ずかしい。

「うん、行こっか」

図書室の場所だけは覚えてるからね。図書室だけは覚えないう！これでもし、ここちゃんが図書室の場所を覚えてなかったって行ける。

どんな本があるかな。私はライトノベル希望。それ以外でもいいんだけどね。基本的に、読むのはライトノベルなんだ。……いや、怪しいのとかは読まないよ？ ちゃんと、中一が見ちゃ駄目な場面が出てきたらその本は読まないもん。絶対。

ほうつ、一階は涼しいな。

一階に下りて、少しため息をつく。一年生の教室は三階にあるから、暑いんだよね。春でこれなら、夏はどうなるんだろう。

「……ねえ、亜梨香。図書室、一階にあるのはわかるんだけど……」
「忘れちゃった？ 私覚えてるから、一緒に行けば大丈夫だよ」

好きなこと、興味があることに対する記憶力はすごいって自分でも言える。勉強は大っ嫌いだけど。

たとえば、本とか。あとは……最近ハマってるのは百人一首かな。特に六十一番の「いにしへの」の歌が好き。理由はわからないけどね。何だか聞くと心が明るくなるっていうか……。

そんなことを考えているうちに、図書室に着いた。ドアを開けようと手を伸ばすと、同時に横から手が伸びてくる。

「うげっ、佑」

「ここちゃんが、ものすごく嫌そうに顔をしかめる。佑って……この子のことか。」

横を見ると、私とこちゃんより背が高い男の子がいた。中一で私たちより大きい男子ってあんまりいないのにな。私はそう思いながら、ここちゃんと『佑』君の顔を見比べた。

『佑君……ここちゃんのこと好きなのかな？ わかりやすい。』

第六話 ようやく図書室に行けます。（後書き）

連続投稿はこれでおしまいです。

君の瞳に……の後に続く言葉は、知ってる人は知ってるはず。あの曲は結構有名……だと思っているのは私だけでしょうか。

第七話 やっぱり文芸部がいいです。（前書き）

しばらく投稿せず、すみませんでした。

勝手ですが、私が書いているもう一つの小説を優先したいと思っています。なのでこれからの更新は、月に一回程度になります。

第七話 やっぱり文芸部がいいです。

こんなにわかりやすい子、初めて見た。ここちゃんは気付いてないみたいけど……どうして気付かないんだろ？

「うげって何だよ。失礼な」

「あーはいはい、ゴメンナサイ。……あ、亜梨香。こいつのことなんてほつといて、さっさと図書室に入りましょう」

哀れだ……。ここちゃんは男の子を無視して図書室に入ってしまった。
う。

私もちよつと迷ったけど、早く本を読みたいからここちゃんの後
に続く。ごめんね、『佑』君。この子のフルネームって何なんだろ
う。

「ここちゃん、今の子は誰？」

さっそく本を選ぶうとしていたここちゃんが、またものすごく嫌
そうに顔をしかめる。そ、そこまで嫌そうな顔するの？ 可哀想だ
よ？

「今井佑^{いまいゆう}。幼稚園、小学校ともずーっと同じクラスだったの。やつ
とクラスが離れて嬉しいわ」

今井君、かあ。

「ここちゃんって、好きな子いる？」
「ん？ いないけど」

小声で訊くと、ここちゃんは首をかしげてそう答えた。

そっか、いないんだったら今井君のこと応援しようかな？　ここちゃんは嫌そうな顔をしていても、今井君のこと嫌いじゃなさそうだし。

あ、今井君が入ってきた。……ここちゃんは無視してる。本当に可哀想だな……。

まあ、今は私も本を選ぼう。

うーん、期待してたから余計がっかりだ。小学校の図書室より狭い。

とりあえずここちゃんが物色している本棚をしてみる。あれ？　この本棚ほとんど読んだことあるやつだ。他の本棚は……本が古すぎて読む気になれない。新しく入った本は、どこにあるんだろう。きよろきよろと探して、それらしき本棚を探す。……あそこかな。

この本、前にお母さんが読んでた気がする。久しぶりにライトノベルじゃなくて、普通の本も読むか。一応この図書室にもライトノベルはあるけど、全部読んだことある。……私ってオタク？

椅子に座って本を開くと、隣にここちゃんが座る。

「……ここちゃん？」

それって……絵本、だよな？　中学校にも絵本ってあるんだ……じゃなくて、お母さんに本を読みなさいって言われてたんでしょ？　絵本でいいの？

「……普通の本は、最初の数行で諦めたわ。眠くなっちゃって」
だから絵本なんだ。

「絵本を読んでるうちに、だんだん眠くならないようになるかな……って思ったのよ」
「なるほど」

ここちゃんがそれでいいなら、私は何も言わなくていいか。
開いた本に集中して読み始めると……無情にもチャイムが鳴った。
す、数ページしか読んでないよ？

* * *

短い昼休みが終わり、五時間目は体育館で部活の説明だった。
私と季郷ちゃん以外は、皆体育館に行ってしまうている。

「……霜月、いつまでも落ち込んでないで行くぞ」

「だって季郷ちゃん！ 本全然読めなかったんだよ！？」

本好きの季郷ちゃんならきつとわかってくれる！ 今どれだけ私がそのことを残念に思ってるか！

やっぱり昼休みが短すぎるんだよ。これからは絶対、学校の図書館では本読まないもん。図書室には図書委員の仕事じゃないと行かない。

「一人だけ遅れてもいいのか？」

「別にいいもん」

「……へえ？」

体育館は下駄箱の所を左に曲がればいいだけ。道は覚えてるから一人でも行ける。

……でも、一人だけ遅れるのってすごい恥ずかしいよなあ。部活の説明が始まってるのにもかかわらず、堂々と体育館に入っていく

なんて無理だ。

私を置いて教室を出て行ってしまいそうになった季郷ちゃんを、慌てて引き止める。

「待つて！ やっぱり私も行く！」

持ち物は……えーつとないよね。季郷ちゃんは何も持ってないし。走って季郷ちゃんの所へ行く。

後少しで五時間目開始のチャイムが鳴る。私たちが体育館に行き、一年三組の列に並んですぐにチャイムが鳴った。ぎ、ぎりぎりだー。

チャイムが鳴ったので、部活の説明が始まった。

運動部（女バスとか野球部とか）は実演もしながら、新入生にアピールしていた。吹奏楽は格好良かったなあ。運動部ではないけど、小学校のときは全然違って、感動してしまった。吹奏楽に入っても良かったかな？ まだ入ってないけどね。

私が入りたいと思ってるのは文芸部。美術部は描いた絵とかを見せてたけど、文芸部は書いた小説を見せられない。特に目立ったこともせず、部長が文芸部の説明をただけだった。

「活動日は火曜日・水曜日・金曜日です。ですが基本的にゆるい部活なので、さぼっても平気です」

とか、

「図書室はクーラーがあるので、夏は涼しいですよ」

とか。部長さんは間延びした口調みたいだ。だけど、聞いててうつとくしくない。私はむしろ話を聞いていて、部長さんのことが好きになってしまった。……言うておくけど、部長さんは女の子だよ

？　そういう感情ではないからね？

それにしても、部長さんちっちゃいなあ。髪型もツインテールだから、三年生には全然見えない。中学三年じゃなくて、小学校の三年生って言われても納得できてしまいそうだ。

「これで文芸部の説明を終わります」

部長さんの話を聞く前から入りたかったけど、もっと文芸部に入りたくなってきた。運動部にはついていけないだろうし、やっぱり文芸部に入ろう。

ここちゃんは自己紹介で言ってた通り吹奏楽、季郷ちゃんは帰宅部にしようと思っているみたいだ。季郷ちゃんは忙しくて、部活ができないだろうからと言っていた。

……美奈は、どうするんだろう。

第八話 文芸部に入部です！（前書き）

二ヶ月ぶりの投稿……。これから最低でも一ヶ月に一度は、こちらにも投稿したいと思います。

第八話 文芸部に入部です！

そうつと図書室の扉を開けてみる。いつも昼休みに来る図書室と今……つまり放課後に来る図書室とでは少し違つて見えた。

「失礼しま……す……？」

失礼します、つて別に言わなくてもよかつたかな？ 職員室の扉を開けるときみたいについ言っちゃつたけど。

終学活が終わつてすぐに図書室に来たから、中にはまだ数人しかいなかった。知ってる人というか、ちびっ子部長さんの姿を見つけて私はほつとした。あ、ちびっ子部長さんつて言い方駄目かな？ すこいびつたりな気がするんだけどなあ。

入つてきた私を見て、部長さんがにこにこしながら歩いてきた。

「こんにちは。仮入部ですか？」

「あ、はい、こんにちは！」

教室で書いてきた仮入部届けを、かばんから取り出す。

部長さんに渡すと、それを部長さんは嬉しそうに受け取つた。

「適当な場所に座ってください。それから、あの……文芸部と言つても、あまり文芸部らしい活動はしないんですけど……。えつと……とりあえず、書きたい物語のアイデアを紙に書いていてくれますか？」

はい、とうなずいて適当な椅子に座る。……うん、わかつてたよ。何となく文芸部らしい活動はあまりないんだなあって。まあいっか。

私はルーズリーフに書きたい物語のアイデアを書き始めた。今この瞬間に思いついた話ではもちろんない。この間夜寝る前に思いついた話だけど、アイディアを書くのを忘れてたんだ。書こうと思ったときに思いつくのなら、何にも苦労しないと思う。……私は話を書いてる途中に他の話が浮かんで、逆に苦労しちゃうんだけどね。

思いついたのは、魔法が使えなくなった魔女の話。何となくぼんつと頭にそれが浮かんで、どうして使えなくなったんだろう？とか、魔女が魔法を使えなくなったたらどうなるんだろう？とか色々考えていたら、結構長くなっちゃったんだ。だから紙に書いて、いない部分をなくしたりエピソードを付け足したりしてる。魔女が魔法を使えなくなったら、っていうふうな話にするとして。魔法を使えなくなったらのは……封印されてたから、かな。封印されたらどうして魔法を使えなくなるのか、とかは後で考えよう。

あとは登場人物のプロフィール。主人公は当然魔女で……相手役はどうしよう。まあ、それは後でいいか。友達は……何となく巫女で。心が読める、ってことにしようかな？あ、主人公は封印されてたんだから、その封印を解いたってことにして。巫女なんだから不思議な力があつたっていいしね。それで、最初のうちは魔女は巫女とかかわるのを嫌がってたけど、だんだん仲良くなって……。これは結構王道だなあ……。

たくさん書いていっていると、ふと隣の椅子に部長さんが座っていることに気付いた。何か用事があるのかな？動かしていた手を止めて、部長さんの顔を見る。

部長さんは慌てて首を振った。

「わ、私のことは気にしないでください」

え、そう言われても……。

思わず私は紙を隠してしまった。……だ、だって恥ずかしいし。小説を……まあまだ小説じゃないけど、こういうのを見られるのはとてもなく恥ずかしい。小説家希望が小説を読まれるのが恥ずかしいのってどうなんだ、とは思うけど、恥ずかしいものは恥ずかしいんだ。

部長さんの残念そうな顔に、罪悪感がわく。でも、できれば小説が完成してから読んでもらいたい。まだ誰にも私の書いたものは読んでもらってないし。

「えっと……部長さん、他の一年生ってまだ来ないんですね」

仮入部届けを見る部長さん。

「私は一人も来ないと思っていましたから、霜月さんが来てびっくりです」

あ、名前覚えてなかったんだね。

そういえば私も、部長さんの名前知らないや。というか文芸部の人全員の名前も知らない。

「あの、部長さん。自己紹介って、いつやるんですか……？」

「……忘れてました。皆さん、集まってください！」

部長さんの呼びかけに、先輩たちが集まる。……あれ、入ってきたときから人数が増えてない。

女子の先輩が部長さん合わせて四人、男子の先輩が三人。合計七人しかいなかった。まだ来てないのかな、とは思ったけどそれは違うみたいだ。

「少ないでしょう？ 文芸部は、霜月さんも合わせて八人しかないんです」

確かこの学校は、五人以上で部として活動できたはず。この七人の中で三年生はどのくらいいるんだろう。これは、来年頑張って新入生を集めるしかないなあ。

部長さんから順番に自己紹介を始める。

「ではまず私から。私は三年五組の前里沙姫まえさと さきです。よく書くのは推理小説ですね、よろしく願いします」

ふむふむ、沙姫先輩。得意なジャンルはミステリー、と。
隣の女の子がにっこり笑う。

「私は三年一組の杉原禾琳すぎはら かりんだよ。一応これでも副部長なの！ よろしくね！」

元気がいい先輩だなあ。何だか可愛い。副部長さんかあ。……部長さんと副部長さんの名前くらいは覚えなきゃな。前里沙姫先輩と杉原禾琳先輩。お、覚えづらいかも。

他の先輩たちも、順番に自己紹介を始める。

「わたしは椎田千捺しいだ ちなつだ。禾琳と同じ三年一組だ。書記をやっている。以後よろしく頼む」

女の子なのにな変わったしやべり方をする千捺先輩。サラサラな黒髪を高い位置で一つにまとめている。キリッとした涼しげな眼をした、格好いい先輩だった。綺麗、よりも格好いい、が似合う人。

「二年三組の宮野朱葉みやの あげはよ。鍵マスター……っていうのはわかるかし

ら？ とりあえずね、あたしが一番最初にここの鍵を開けてるから」

鍵マスターの朱葉先輩。思わず朱葉お姉さまって呼びたくなるよ
うな……？ 名は体を表す、がびったり。漢字は違うだろうけど、
揚羽蝶みたいなイメージの人だった。

「……三年二組の西川響一だ」
にしかななついで

学年クラス名前しか言わない響一先輩。無口な人みたいだ。

「う、浮羽英輔です……」。二年三組です、よろしくお願いします」
うきはえいすけ

びくびくした、気弱な英輔先輩。ん？ もしかして私よりもちっ
ちやいか。何だか可愛いな、この先輩。名前からして男の子なんだ
ろうけど、どこからどう見たって女の子だ。つまり女顔。……うん。
兔みたい。

「二年七組の三村空だよ。よろしくね、亜梨香ちゃん」
みつむらそら
「は、はい」

こういう人苦手だな……何だか将来ホストになりそう。というか
もう私の名前知ってるんだ？

えっと、全員ちゃんと覚えられたかな。

沙姫先輩と禾琳先輩と、英輔先輩と……駄目だ。もう覚えてない。
このホストさんって何て名前だっけ。

思い出そうと必死になっていると、全員からじーっと見られる。
どうしたんだろう、って私の番か。

「一年三組の霜月亜梨香です。よろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀をすると、なぜか微笑ましげに見られた。な、何だろうこの視線。すごい嫌だ。

……ん？ 今気付いたけど、全く顔が熱くなってない。ということとは、緊張しなかったってことなのかな？

そんなこと今までなかったけど……そうだとしたら、文芸部で楽しくやっていけそうな気がする。

結局その日は、一年生が仮入部しに来ることはなかった。それでも私は何だか、これからの先輩たちとの部活動が楽しみになった。

第八話 文芸部に入部です！（後書き）

次はいつになるかな？ 早いかもしれませんし、遅いかもしれません。もしどなたかがこの小説をお気に入り登録してくだされば頑張りますが。……いえ、登録してくださいと言っているわけじゃないんです。本当です。

第九話 初めての委員会です。（前書き）

三ヶ月もあいてしまいました…… 申し訳ありません。

八話の後書きに変なことを書いてしまったせいか、お気に入り登録してくださった方がいらっしやいました。これは頑張らねば！
と思い、投稿しました……。これから投稿スピードが速くなるかはわかりませんが、できる限り速くしていきたいです。

第九話 初めての委員会です。

今日は初めての委員会がある日だった。委員会が終わった後に部活があるから、そのまま図書室に残っていていい。楽ちんだ。

終学活が終わって、私はかばんを持って歩き出した。今週、私の班は掃除なしだ。

「あ、季郷ちゃんまた明日！」

「ああ」

黒板掃除をしている季郷ちゃんに手を振って、教室を出る。
と、思ったら、東郷先生が慌てたように教室の皆に声をかけた。

「委員会がある奴は、この紙を持っていけ！ 委員会が終わったら俺に提出しに来ること」

なるほど、紙を配るの忘れてたんだね。でももう委員会に行っちゃった子もいると思うんだけど……まあ、紙がなくても何とかなるか。もし委員会の先生とかに怒られたら、東郷先生のせいにしちゃえばいいし。

先生が教卓の上に置いた紙を、委員会に入っている子に取りにくる。空いてきた頃を狙って、私も紙を一枚取った。書くのは話し合いの内容とクラスの皆に伝えること。めんどくさい……なんて思っちゃ駄目だよな。でもこの紙、委員会が終わったら先生に出すって書いてある。図書室に残ってようと思ってたのに……。

「季郷ちゃん、今度こそまた明日」

「ん、また明日」

よし、面倒臭がらずに委員会も部活も頑張ろう。

そんなことを思いながら、階段を下りる。ふふん、図書室へは問題なく行けるのですよ。……って私は一人で何を自慢してるんだ。そもそも図書室に行けるっていうのはわかってることだし。だってここちゃんとも行っだし、一人で仮入部しにも行っだしね？

一階に下りて、図書室に向かう。ついでに着くまでの間にどんな教室があるか見ておこう。

えっと、被服室に……特別学習室。あれ、もう一つ特別学習室があるな。

一つ一つ見ていっている内に、図書室に着いた。何人かドアの前でうろつろしている。どうしたんだろう、図書室が開いてないのかな？

確認してみると、やっぱり開いてない。しょうがない、図書委員担当の先生が来るまで待つか……。

「えっと……図書委員の子？」

「へ？」

急に話しかけられて、ちょっとびっくりする。知らない子しかいなかったし、まさか話しかけられるとは思わなかった。

上履きの色を確認すると、青色の線が入っている。上履きの色は学年別で、黄色が三年、赤が二年、青が一年なんだ。

ってことは、この子は同じ一年生。

私は話しかけてきた女の子に笑顔でうなずいた。

「うん、図書委員だよ」

「そっかぁ。その、これからよろしくお願いします……？」

なぜに疑問系なんですか。

とりあえず頭を下げられたから下げ返しておく。

「よろしくお願いします」

「んつと、わたしは花谷蒼音はなたに あおねです」

「私は霜月亜梨香だよ」

蒼音ちゃんか。ちよつと変わった名前だなあ。苗字と合わせると、何だか綺麗な響き。

慣れてない人と話すのは苦手なので、特に会話もなく一緒に先生が来るのを待つ。ち、沈黙って結構辛いよね。

何かないかな、話題。

必死に探して、ぱつと思いついたことを口にする。

「蒼音ちゃんは、部活何に入るの？」

「ええつと、文芸部に入るつもりだよ」

丁寧語が基本かと思ったら違うのか。

というか、文芸部なんだ？ 昨日仮入部に来なかったのは、何か用事があったのかな。

「文芸か、私も昨日から仮入部してるよ」

「へえ、そうなんだあ。うん、もう一回言うことになるけど、これからよろしくお願いします」

「よろしくね」

あ、今の私の台詞、部長さんぽかった気がする……！ って、そんな喜ぶ必要ないことが。

…… また沈黙だ。無理に話そうとしても、絶対会話は弾まないん

だよなあ。ここは静かに先生を待つか。

しばらくすると、顔は知ってるけど名前は知らない女の先生が来た。一年何組かの担任だった気がするけど、やっぱりわかんないや。誰だっけ？

「待たせてごめんね、今開けるから」

そう言っただけで先生は鍵で扉を開けようとした。でも、何回鍵穴に鍵をさそうとしてもささらない。「あれ？」と焦ったように先生は何度も鍵をさそうとした。

……鍵、間違えたんじゃないのかな？ そうじゃなかったら、普通にささってるはずだろうし。

一分くらい先生は奮闘してたけど、諦めたのか鍵を確認する。途端に恥ずかしそうな顔になって、足早に職員室に向かって歩いていった。

「やっぱり鍵違ってたんだ」

蒼音ちゃんに言ったつもりだったけど、独り言だと思われたのか返事はなかった。蒼音ちゃんのほうじゃなくて、先生が歩いていったほうを見ながらだったからかな。無視されたわけじゃないけど……何か寂しい。

* * *

先生が図書室の鍵を持ってきて、私たちは学年、クラス別に椅子に座った。そういえば、私のクラスの男子の図書委員って誰なんだろう？ まだ来てない。委員会一日目からさぼるなんて。……いや、疑っちゃ駄目だ。単に忘れてただけかもしれない。それか、掃除が

長引いてるか。

「それでは、これから委員会を始めます」

三年生の女の子が前に立った。あの子が委員長なのかな？

「ではまず、委員長を決めたいと思います。やりたい人はいماشゆか？」

委員長じゃなかったみたい。いましゆか、と言ったことについては何も突っ込まないでおこう。噛むことなんて、人間誰にでもあることだし！ うん、私もよくやります、安心してください。

先輩を心の中で励ますけど、やっぱり笑う人はいる。何て気遣いの足りない人たちなんだろう、自分が噛んで笑われたらどう思うか考えればいいのに。

恥ずかしそうに少し下を向いて、先輩は言葉を続けた。

「いないようなので、私がやってもいいでしょうか？ 反対の人は手を挙げてください」

反対する人はいない。私はこの先輩のことをよく知らないけど、それなりに知ってるはずの三年の先輩たちが手を挙げてないんだから、この先輩は信頼できる人なんだろう。

「では、私が委員長をやることにします。次に、副委員長と書記を決めます。一学年に一人ずつなので、各学年で話し合ってください」

うわっ、一年からも副委員長と書記が出るんだ……。絶対やりたくない。

一年生の皆、それは同じみだった。お互いの顔をちらちら見

ていて、誰かやってくれないかなと考えているのが丸わかり。最近の子は他人任せだなあ。まあ、私が言えることじゃないんだけどね。私だって他人任せだし。

でも、これじゃあ話が進まない。副委員長は嫌だけど、書記ならいいかな……？

「あの」

ちよつと口を開くだけで、皆の視線が集まる。おおっ？ 何かこれは怖いよ、すごく。

思わず口を閉じようとしちゃったけど、頑張って続けた。

「私、書記やります」

少しだけほつとしたような雰囲気になる。けど、まだ副委員長が残ってるんだ。すぐに皆不安げな顔に戻った。

ああもう、どうすればいいのかな？

途方に暮れていると、勢いよく図書室に誰かが入ってきた。

「すみません、遅れました」

入り口前にいた先生に謝ってから、その子はこっちに向かってくる。上履きの色からしても、この子は一年生。……どっかで見たことあるような？

そう思っていたら、私の隣に座った。

なるほど、同じクラスの子だったんだね。通りで見覚えがあると思った。忘れててごめんなさい。

「今って、何してるところ？」

その子は小声で訊いてきた。

「えっ、あの、副委員長を決めてるところだよ」

知らない子、しかも男子に話しかけられると何だか挙動不審になっちゃう。というか、本当にこの子誰だっけ。

その子は一年生全員の顔を見て、誰もやりたがっていないってことを察してみたかった。

「あつ、じゃあ僕やるっか？ 決まってるんだよね？」

「え、伶音がやんの？」

「へー、僕じゃ不満？」

驚いたように言う知らない男子に、伶音君は意地悪そうな笑みを浮かべた。

伶音……伶音。もうちょっとで思い出せそうなのに思い出せない。あ、でも私が思い出せそうってことは、記憶に残ってるってことだよな。伶音って日本人っぽくない名前だし……ん、これ前に考えたことあるなあ。

私が思い出そうとしてる間に、副委員長は伶音君で決まったみたいだ。

これで全学年が決まったので、次は活動内容についての説明が始まる。どのクラスが何曜日に当番をやるか書かれている紙が配られた。私のクラスは……丁度一週間後だった。

委員長さんが図書当番の仕事内容を言っ、今日の委員会はおしまい。書記の出番がなくてちょっと安心した。委員会、短すぎた気もするけど。

委員会が終わったら、話し合いの内容を書いた紙を先生に渡さないと。二人で、って書いてあるから、伶音君にも一緒に行ってもら

わなきゃ。

あ、委員の名前書く欄がある。ささつと書いてつと。

「あの、これ先生に二人で出しに行かなきゃ駄目なんだけど……。名前、書いてくれない？」

「ん、わかった」

これで伶音君の苗字もわかる。

伶音君が書く様子を、不自然じゃない程度に観察する。相…羽、伶音。相羽伶音君。

思い出した！ 泉ちゃんの名前を確認したときに見た、出席番号一番の相羽伶音君だあ。へえ、この子が相羽君だったんだ。

「書いたよ……つてどうかした？」

「え！？ いや、何でもないよ！？」

思い出せたことにちよつと感動してたら、怪しまれてしまった。

なかなか思い出せなかったけど最後にはちゃんと思い出せたし、案外私、覚えようと思えば人の顔と名前を覚えられるのかも。

第九話 初めての委員会です。（後書き）

次話はおそらく、部活の話になる……かも？

第十話 仮入部する一年生が来ました。(前書き)

遅くなりすみません！ しかも、今回の終わり方は微妙……。

第十話 仮入部する一年生が来ました。

先生に紙を出しに行ってから、私は図書室に戻ってきた。入ると、中には先輩が一人。座って何か本を読んでいた。

ええっと……この人は確か副部長さんの。禾琳先輩、だよな？

昨日頑張って先輩たちの名前を復習したけど、間違えてないよね？
んー、ここは間違えのないよう副部長さん、と呼んでおこうか。

「副部長さん」

私が呼んでから気付いたのか、副部長さん……多分だけど禾琳先輩は、びっくりしたみたいに本から顔を上げた。

「おつ、亜梨香ちゃんっ。こんにちは」

「はい、こんにちは」

挨拶をして満足げにうなずくと、禾琳先輩は本に目を戻す。何読んでるんだろっ？

失礼とは思ったけど、禾琳先輩が呼んでいる本をそうつと盗み見る。……って蛇！？ 大きさからして文庫本ではないと思ってたけど、もしかして蛇の図鑑！？

禾琳先輩は私がいることも気にせず、むふふと幸せそうな笑みを浮かべている。まさかの蛇好きさんですか？

「あの……」

「ん？」

声をかけてから後悔。何してるんだ私、本読んどるときに邪魔されるのは私が一番嫌なことなのに！ きつと禾琳先輩も、内心では

怒ってるんじゃないのかな。

でも、何でもありませんって言うのも、それはそれで禾琳先輩の機嫌を損ねちゃうかもしれない。ここは素直に思ったことを訊こう。

「先輩は、蛇が好きなんですか？」

「そうだよつ。あ、もしかして亜梨香ちゃんも蛇が好き？」

「いえ！」

慌てて否定すると、禾琳先輩は残念そうな顔をする。

あつ、好きなものを否定されたら傷つくものだよね……。曖昧にごまかしておかなきゃ駄目だったよな、今は。

「何でだろうなあ？ 女の子って、蛇とか蛙とか虫とか、嫌いな子多いよね。あんなに可愛いのになつ、みんなおかしいよつ」

女の子ならそういうものの嫌いなのが普通じゃないかな？ 私は嫌いとは行かないけど、結構苦手。あ、だけど虫の中でも蚊だけは嫌い。あと他のは苦手なだけだな。

どうして禾琳先輩は蛇を見てあんな幸せができるんだろう、と考えていたとき、ドアが開いて鍵マスターさんが入ってきた。この人は……うんそう、揚羽蝶。じゃなくて朱葉先輩だ。あげは朱葉先輩は私たちを見て、悔しそうに指差した。

「禾琳先輩！ 鍵マスターはあたしなんですよ！？ 先輩に先……」
「……というか一年生にも先に来られたら、あたしは鍵マスター失格だわ……」

怒っていた朱葉先輩だけど、だんだんと落ち込み始める。

「朱葉、人を指差しちゃ駄目だよ？ それから、朱葉が遅かったから私は先に来たんだからね。というか今日は、鍵マスターはお仕事元々なかったと思うけど？」

「どういうことですか！」

朱葉先輩はむっとしたような顔になって禾琳先輩に言う。鍵マスターが元々仕事なかったって……ああ、委員会で図書室はすでに開いてたからか。開いてるんだから鍵マスターの仕事はないよね。

朱葉先輩は訊いてから気付いたのか、「そういうことか……」とため息をつく。それを聞いて、禾琳先輩は面白そうに笑った。

そうしていると、続々と文芸部の人たちが集まってくる。名前は沙姫先輩と千捺先輩以外、つまりは女子の先輩以外の名前はうる覚え。だけど仕方ないよねえ、あはは。……ごめんなさい、男子の先輩たち。

心の中で謝って、私は椅子に座った。全員が集まったから、お喋りタイムは終了にしないと。

そういえば蒼音ちゃん、仮入部にこないのかなあ？ 二、三年生の中に一年一人だけだとちょっとどころじゃなく居心地が悪い。

と思っていたら。

ゆっくりゆっくり扉が開いて、蒼音ちゃんが不安げに入ってきた。小さく手を振ると、ほっとした顔になる。

蒼音ちゃんに気付いたのか、部長さんが話しかけた。

「仮入部ですか？」

「え、あ、そうです。えっと、これ」

そう言って蒼音ちゃんは仮入部届けを部長さんに渡す。

部長さんはそわそわと落ち着かない蒼音ちゃんを微笑ましげに見

た。

「花谷さん、霜月さんの近くに座ってください。霜月さん、色々教えてあげてくださいね。」

「へ？ 教えるようなことってあるんですか？」

別に何も教えるようなことないと思うんだけど……。私だってアイディアを紙に書いておくくらいしか言われてないし。

あれ、もしかしくとも今は言わないほうがよかったのかな？先輩たちが固まってる気がする。

こほん、と部長さんが咳払いをする。

「霜月さん……」

「は、はい！」

間延びしていない口調。私は自然と緊張した。

「その通りですね。教えるようなことなんてありません。花谷さん、自由に過ごしててください。」

ほっ、怒ってなかったみたいだ。部長さん、にっこり笑ってるし。目が笑ってない気がするのは気のせいだと思いこんでおけば平気だ。蒼音ちゃんだって部長さんにちよつとだけ怯えてる気がするけど、素直に私のほうに来てるしね！。

「あ、亜梨香ちゃん、その、何すればいいの？」

「多分だけど、好きな本読んでもか、自分の書きたい話のアイディアを紙に書いてればいいと思うよ。」

「ああ……えつとね、わたし紙ってノートの紙しかないんだけど。」

「それならあげるよ、ちよつと待ってて。」

「ごそごそとかばんからルーズリーフを取り出す。適当なページを開いて一枚破る。んー、蒼音ちゃん破れた穴がびらびらーってなるの嫌じゃないかな？」

蒼音ちゃんの顔を見ると特に気にしてなさそうだったので、はいと渡した。あ、けど一枚で足りるのか？ 裏表びつしり書く時間はないだろうし、大丈夫かな。

「もう一枚いる？」

「へ、あ、うん、一応もらっておくよ」

蒼音ちゃんがそう答えたので、私はもう一枚渡した。渡された紙を机に置いて、蒼音ちゃんが私の向かいに座る。筆箱を出して、何を書くか迷ってるみたいだった。

さてと、私も昨日の続きを書くでしょう。って言っても、昨日の夜考え付くアイディアは全部書きちゃったんだけどね。

うーん、他の話のアイディアを考えるか、もう考えてある魔女の話を書くか。迷うところだなあ。アイディアを書くのは手書きのほうがいいけど、実際に小説を書くのならパソコンで書きたいし。

迷っていると、蒼音ちゃんがおそろおそろ訊いてきた。

「ねえ、亜梨香ちゃん、その、どんなの書けばいいの？」

「え？」

どんなのって言われても。個人個人で書きたい話は違うし、私がこつこつこのを書けばいいって言ったら、それは私が作った話になっちゃうよね？

「自分が書きたい話を書けばいいと思うけど……」

「それが思いつかないんだよー」

思いつかないときに無理に考えたって、面白い話は書けない。

「思いつかないならとりあえず、先輩たちに自己紹介してもらった
ら？ まだしてもらってないよね？」

「あ、そういえば。……んー、そうだね、自己紹介してもらおう。
けど、自己紹介してくださいってこっちから言うのは駄目じゃない
？ それにえっと、誰に言えいいかわからないし」

もしかして蒼音ちゃんって、結構面倒臭い子？ いやいや、そん
なこと思ったらいけないよね。違うことを考えよう。

蒼音ちゃん、『あの』とか『その』とか『えっと』とかよく使う
なあ、口癖かな？ 挙動不審になつてるときの私みたい。……いや、
これも考えちゃいけない！

余計なことを考えないため、私は口を開いた。

「部長さんに言おうか、私が。蒼音ちゃんに自己紹介してください
って」

「お、お願いできる？」

ほっとした顔で言う蒼音ちゃん。こんな顔されたら嫌だなんて言
えないな……。

でも、仮入部する子が来るたびに自己紹介するのは、先輩たちも
大変な気がする。もう一人くらい誰か来てから自己紹介してくださ
いって言おうかな？

「……すみません、仮入部をしたいんですが」

おー、そう思った途端一年生が来たよ、すごい。

第十話 仮入部する一年生が来ました。(後書き)

次の話は、できるだけ早く(一週間以内には!)書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0833u/>

霜月亜梨香の中学生活。

2012年1月4日13時48分発行